

偶像より真仏へ

死仏

甲「先生、私はお説教を聞いている時はありがたくもつたいたなく、今死ぬれば、そのまま浄土へまいられる気がするのですが、少し日数がたつと、すぐ道が二つになつてきて、ひよつとして間違つたらと心配になつてきます。どうしたら、いつも変わらぬ信心が得られますか。」

乙「そんな信心を得て何にするのですか。」

甲「何にすると言つて………信心がなければ助かりません。永劫に苦患を受けねばならんではありませんか。」

乙「なるほど………だが、それはできませんね。」

甲「できなんだから大ごとです。どうかしてください。打つてでもたたいてでも。」

乙「いつたい、あなたはどんなことを聞いているのですか。」

甲「私は悪人の愚者でありますが、如来様の他力の本願一つで、お浄土へまいらしていただけると思います。………ですが、どうしても参らしていただく身になれません。またしても悪いやつが頭をもたげて。」

乙「あなたの如来は、死仏だ。」

甲「なぜですか。」

偶像

乙「なぜと言つて、そんなに苦しんでいるあなたを助けられないじゃないか。あなたが考へているのは、仏ではなくて、仏の話や、あなたの古ぼけた考えや、理論や、そうした材料をよせ集めて造り上げた、お粗末な偶像だよ。」

甲「偶像つて何のことですか。」

乙「偶像とは何か知らなければちよつと困るが………人間は頭の中にいろいろなものをつめこんでいる。哲学だ、科学だ、善だ悪だ、人生観だ、宇宙観だと、ずいぶん頭の中へ入れているが、そうしたものを集めて土で人形を造るように、美しいものを造り上げることだよ。そしてその偶像にお願いしておかげを蒙ろうとしたり、その偶像に自分をあてはめたり、人におしついたり、主義を考え出したりするので。あなたの仏がそれである。美しいものには違いないが、石膏細工のように固まったままで動かないでしょう。だからあなたがそれにあなたを近づけよう、型にはめようとすればするほど、そうならないじゃありませんか。」

甲「そう言われると、そのようでもありますが、得心いたしません。」

仏はいます

乙「南無阿弥陀仏は、そのような偶像ではなくて、むしろ人間の考えるあらゆる考え方、あらゆる偶像の一切を打ちこわす大鉄槌です。あなたは、一足出るのにも、方角を言つたり日柄を見たりして、いちいち神様のご意向を承る人があるのを知っていますか。」

甲「それは知っています。そして私はそれはしません。」

乙「あの人たちから言えば、何かしら人間よりも強いものがいて、日柄や方角の悪いのに出てはならんように思っているのです。それはただ狂った頭の中にあるだけで、ほんとうにありはしない。それと同じように、あなたの仏も、それはあなたが勝手にお粗末な道具で造り上げたもので、そんな仏はいやしない。」

甲「それなら仏様はいないのですか。」

乙「そんなことは言っていないません。如来のみが実在しますのだ。あなたの持っているのは仏ではない偶像だ。」

人間のとらわれ

甲「いよいよわかりません。……………それになんとか何もかも壊れてしまうよう
でいよいよ苦しみが深くなります。」

乙「人間は一度何でも手に持つとそれが棄てられぬものです。たとい一個の湯呑に
したところが、長年聞いて聞いてこびりついたガラクタ道具が、頭の中にいつぱい
あつて、棄てられないのです。」

甲「しかし、ガラクタ道具だと言われますが、ありがとうて涙したこともありました。
それはただの理屈だけじゃなかった。」

乙「その涙が今のあなたと何の関係がある。そしてその安っぽい甘い涙こそ、如来の
真実をくまます毒素なのだ。」

甲「それはまたなぜです。」

乙「あなたをだます悪魔の仕業だ。論より証拠、その涙が今のあなたを救っていない
ばかりか、またしても阿片の中毒患者がするように、毒を求めているではないか。」

甲「それなら、お説教が間違っているのです。坊さんがいけないのです。」

真仏と偶像のちがひ

乙「それを怒つても仕方がない。敵は本能寺にあり、今そこに、毒の甘酒を求めら
つが、そこにいるのだ。貪欲という仇敵がその心中に。」

甲「ああ、私はどうすればいいのでしょうか。」

乙「もがかれるだけがくのですね。何もかも打ちこわすのです。」

甲「先生、ほんとうの仏と、偶像とはどれだけ違いますか。」

乙「それがまだわかりませんか。偶像は、貪欲の好くもの、賢くなつたり、悟りすま
したり、高慢になつたりせられるし、楽になつたり、都合がよかつたりするから。
真仏は、貪欲のいちばん嫌うもの、何もかも打ちくだかれて、正体が暴露するか
ら。」

甲「あれ！ 私の拝んでいたのは偶像でした。……………」

乙「あるダラシのない男が、それでも君は仏教徒かと人に言われると、知った限りの
仏教語を使って弁解をした。貪欲の網さばきてあつて、仏によつて生かされている
のではない。こうなると、仏教が深遠であるだけ、天理教や、金光教や、人の道よ
りも悪い。」

慈悲より智慧に

甲「私がまったくそれだったのです。ああ私はどうしたら救われますか。」

乙「そんな言葉が出ていた間、第三の偶像を求めているのだ。貪欲の声だ。」

甲「それでもこのままでは苦しいばかりです。」

乙「苦しむがいい。」

甲「私は助かりません。こんなにわからない私とは思いませんでした。」

乙「仏は人間のあらゆるはからいを超えたものだ。あなたに微塵も加えることを許さない。人間のあらゆる迷妄を引きちぎって自覚せしめる。」

甲「私はなんだか先生までが恐い気がします。」

乙「彼岸に招喚したもう智慧の慈父が仰ぎ見られるものか。畏るべき厳粛にして絶対なる如来の招喚は、一切の自力、はからい、小智、ゴマ化しなどのすべてを否定する絶対命令である。あまりに真実にして冷たく澄みきれるものを煩惱は喜ばない。であるから、またしても久遠の慈父に叛いて、甘き毒酒の中に姿をくらまそうとするのだ。だが智慧光に叛いて、大悲の懐に帰ろうとするものは、大悲の懐にさえおちつくことはできない。真に母の慈愛を知る子は、それゆえに慈母の懐を後に他郷に出かけて、寂しくとも学ばねばならぬように、大悲に真に救われたものは、智慧の念仏に帰る。であるから、聖人は和讃に

『智慧の念仏うることは 法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし』

と讃嘆せられたのであります。」

大悲は限りなく闇にわけ入って衆生の現実に随順し、摂取したもう。その時光明は慈母の懐であり、名号は彼岸にあつて招喚したもう慈父である。慈父の招喚にむかつて立ち上る時、そこに一切の有碍を超えて、無碍の白道は開いてくる。」

甲「私は間違っていました。まるで方角が違っていました。ああ今日まで何をしていたのでしょ。」

乙「如来招喚の声にさめる時、人ははじめて無智を知るので。一切の偶像は打ちくだかれて、何ものをも握ることを許されず、はじめて如来本願のままに、創造不退の無碍道に立つのである。」

甲「ありがとうございます。」

乙「偶像に自覚を与える力はないが、真仏は絶対の権威をもつて君臨し、無条件に衆生に内在し、顕現して、その人格の本質となる。であるから、南無、帰命の信心までも、機法一体、如来廻向の仏心であるとはこのことである。十悪五逆を諦かに知ることができるのは、真仏の智慧光によって照破せられるがゆえである。」

甲「まことに私は仏を殺していました。死仏を弄んでいました。私はこれから真仏の声を聞いて歩みます。ありがとうございます。」